

## 会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第4回高松市創造都市推進懇談会（U40／第4期）
開催日時	令和元年5月30日（木） 18時30分～20時35分
開催場所	高松市役所3階 32会議室
議 題	（1）事業アイデアについての意見交換
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	徳倉会長、穴吹副会長、中村かおり副会長、大石委員、大崎委員、大美委員、熊野委員、桑村委員、笹川委員、瑞田委員、中村香菜子委員、渡邊委員
市職員	上原、森、武田、美濃
関係課	産業振興課、観光交流課、観光交流課都市交流室、スポーツ振興課
事務局	田井部長、西岡課長、三浦係長、松下
傍聴者	0人      （定員 5人）
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

### 審議経過及び審議結果

#### 1 開会

##### 【会長】

本日は、再検討の事業が出てこなかったもので、関係課と意見交換を行うアイデアと、関係課と協力関係にあるアイデアについて、全体で情報共有やアイデア出しを行って行く予定です。意見交換を行うアイデアについては、3段階の結論に落とし込むイメージを持っていただきたいと思います。まずは、前回の会議で決まりきらなかったアイデアと欠席者のアイデアの結果について、事務局から報告をお願いします。

##### 【事務局】

（事務局から資料1を基に説明。）

##### 【会長】

ありがとうございました。今回は、この資料1にある「△」のアイデアに加えて、前回の会議において関係課の参画が決まっているアイデアについて、話を進めていきたいと思います。順番については、資料2のとおり進め

## 審議経過及び審議結果

たいと思います。それでは、早速、進めていきたいと思います。

### 2 議題（1）事業アイデアについての意見交換

#### 【委員】

私が提案したのは「ことばのバリアフリー」ということでして、都市交流室から回答いただいた内容が、「外国人住民が増大する中、「やさしい日本語」の活用促進は必要であり、政策課が導入している「UD トーク」とも連携できる可能性があるため。」ということで参画希望をしていただいたと認識しております。今回、私からは一方的ながら提案書を作成し、提出させていただいたのですが、都市交流室として参画希望ありとされた理由なり現状についてお聞きしてもよろしいでしょうか。

#### 【都市交流室職員】

理由といたしましては、先ほどおっしゃっていただいたとおり、在住の外国人が今すごく増えています。もう一つ、災害や何かあったときに全ての在住外国人の方が日本語を分かるわけではないので、「やさしい日本語」が必要ということはいくぶん分かります。そういうことで、回答させていただく際には、具体的にどういう事業かは分からなかったのですが、総論として「ことばのバリアフリー」は大事で、市としても推し進めていく必要はあると考えておりますので、既存事業である UD トークであったりといったものと連携しながら進めていく切り口があるのかと思いました。

#### 【委員】

ありがとうございます。皆さん御存知でしょうか。UD トークは、多言語翻訳のアプリケーションのようでして、私も実際に似たようなアプリを使ってみたのですが、言語によってかなり翻訳の精度が違います。その精度のばらつきを埋める方法として、「やさしい日本語」はかなり重要な位置付けではないかと感じております。なぜ、私がこれを提案したかということ、私自身、外国人の方と一緒に、住民票の届出などの関係で市民課に行くことがよくあります。その時、窓口の方はとっても親切なんですけど、親切すぎてとても丁寧な言葉を使ってくたさるので、外国人本人とのコミュニケーションが上手くいかなかったりします。私としては、外国人の方に日本の生活の中でなるべく自立してもらいたいのので、あまり口を出さず見守るスタンスでいるのですが、職員の方も通訳ができる方がいる

と、外国人の方ではなく通訳の方を向いて話をしてしまいます。効率性を考えたらその対応は正しいのかもしれませんが、例えばそこに「やさしい日本語」の一つとしてひらがな表記がある、もしくは、「しめい」ではなく「なまえ」なら知っているというような、その外国人の方が知っている「やさしい日本語」を担当の方も知っていれば、外国人本人とコミュニケーションがスムーズにいくと思います。その具体的な方法として、現在、予算がないということをお伺いしておりますので、提案書の中で時間と労力があれば実施は可能なものとして、2つ提案させていただきます。

1つは、先ほども申しあげたように、外国人の方も知っているかもしれない言語があるということ、窓口で担当する人に少しでも知ってもらうことが大切だと思います。提案書では、市民課をモデルに設定していますが、職員の中で「やさしい日本語」を使うことができる職員であるということが分かれば、その人に代わることができるし、その人が勉強会を開いて職員の間で広げることにも可能だと思います。「やさしい日本語」は何なのかと言いますと、「日本語初学者にもわかりやすいように語彙や文法を調整した言葉」、「漢字表記には仮名をふり、難しい語彙は、わかりやすい言葉に置き換える」、「はっきり言う・さいごまで言う・みじかく言う」というもので、コツさえつかめば誰でもできることなんです。「やさしい日本語」はこうでなければいけないといったルールもないので、皆さんで考えていながら作ることができると思います。そういう中で、人材育成ということで研修は必要かと思うのですが、都市交流室が率先して「やさしい日本語」を広めていくことで、周知ができるのではないかと考えております。

2つ目としては、ホームページなどの電子媒体などで「やさしい日本語」についての記事やお知らせの記事を掲載することです。あとは、手続きのものにひらがなを振ってみた様式を一つ作り、ホームページに挙げておけば、必要に応じてそれぞれの課が使うことができます。これは観光案内にも使うことができると思いますし、仮に、翻訳のブックを作ると、対象がかなり限定されてしまい、現状、それ以外の言語の方が多く来庁されているのではないかと推測しますので、色々な方に幅広く使っていただけるのではないかと思います。

それをすることで、何がUDトークと結びつくかということ、先ほども申しあげたように、言語によって存在する翻訳の精度の差を埋めることができます。例えば、「今日はどうされましたか？」ではなく、「今日は何をしたいですか？」と言い換えると、主語と述語や目的などがはっきりするようになります。ですので、全く日本語ができない外国人の方が相手でも、「やさしい日本語」を使ってUDトークを活用することで、円滑なコミュニケーションが取れると思っています。

す。

【都市交流課職員】

ありがとうございます。「やさしい日本語」の考え方が大事であるということは、私どもも全く同意見でございます。特に、アクセスが簡易になるということで、どこに行ったらいいかわからない方に「やさしい日本語」で伝えることで多くの方がアクセスしやすくなるだろうということは思っています。その一方で、課題を率直に申しあげますと、市民課の例を挙げていただいたように、例えば、市民課の手続きであるとか、ゴミの出し方のパンフレットには、振り仮名を振るということはもちろんあるのですが、簡単なところであれば、「やさしい日本語」で記載することができるのですが、手続きの話になると、細かい言葉を書かなければいけなかったりして、詳細な英語版や中国語版、韓国語版といったことになりまして、転入手続きであれば、法律でこういう言葉を書かなければならないといったことが決められていたりします。そういった場合には、そこに行きつくまでは、「やさしい日本語」で行きついて、そこから先の手続きの話になると、UDトークや当室におります通訳士を派遣するというのが、役割分担といえますか棲み分けができると思っています。どこまでを「やさしい日本語」の役割にして、どこまでを通訳やUDトークの役割にするか、どう整理をしていくのかと思っています。

【委員】

そうですね、そういう線引きというか、通訳の役割というところと「やさしい日本語」の位置付けというところは、なかなか難しいと思います。それに対する回答ではないですが、提案書の2枚目に「やさしい日本語」と「AI翻訳ツール」ということで、おっしゃられたゴミの話でもそうですが、本人がゴミを出すための必要事項、燃えるごみの分け方であったりは「やさしい日本語」でも十分理解出来ると思っています。高松市でしたら絵も駆使されていますので、そこで理解出来たら良いのですが、そこで理解できなくてもっと前に進んだときに、電話通訳などの通訳が必要な対象者になるかと思っています。私が実際に通訳をしているときに感じるのは、通訳が行って必要ない時が多いんですよね。そういう必要がない状況もたくさんあって、振り仮名があれば事足りたとか、書き方を簡単に説明してあれば記入できたということがあるので、そういう事例を集めながら通訳の方や外国人の方に携わる方から色々と情報を集めて、どこまでを線引き模索しながらされていくことが、一番、実情に合った線引きになるのではないかと思います。

【会長】

都市交流室というのは、外国籍の方が、子どもが生まれたのでこども家庭課や市民課に行くことというような様々な場合はあると思うのですが、そういったときに外国籍の方に寄り添うような部署という位置付けでよいのでしょうか。都市交流室の役割ということをお教えいただくと、周りの委員も発言しやすくなると思います。

【都市交流室職員】

海外に都市交流協定を結んでいる都市との交流が一つあり、それ以外に、各課で来庁された方などへの通訳支援や先ほどのゴミのパンフレットのように日本語から多言語への翻訳をしております。

【会長】

整理すると、提案者が目指す課題解決は、「やさしい日本語」の活用範囲をより広げていくことで、他国籍の方でもより住みやすいまちにしていこうという位置付けでよろしいでしょうか。

【委員】

おっしゃっていただいたとおりで間違いありません。

【副会長】

私も外国籍の方を雇っていたりするので、普段も「やさしい日本語」を使っていますし、母国語でないところでのコミュニケーションの難しさを日々感じています。海外から異国に来ている外国人の方は、とって孤独な存在になりますので、どう受け入れてくれるのかというところは、行政の住民票の登録だとかというものはファーストステップになるので、そこでどう受け入れてくれるのかということは、すごく印象に残るものだと思います。特に、海外旅行客が郵便局に行ったらこういう対応だったということは、すごく有名な話だと思うのですが、そこで日本はなんてサービスが良いんだということになりうるので、我々の受入れの態度を示すために、そういうところの改善は非常に効果があるのではないかと思います。

【会長】

一つ気になったのが、「やさしい日本語」を使うシーンの話をされていたので

すが、都市交流室という組織があるんだというところを、他国籍の方がどれぐらい認知しているのかというところがちょっと分かりません。市の手続きとか高松市に暮らす上で何か困ったことがあったら、ここにアクセスしてきたらいいというフックが、分かりやすいところにあるのかというのが、もし、あるのであれば教えていただきたい。もし、ないということでしたら、今はできないけどもU40でそういうことを考えるということをしていくことも素敵なことなのかなと思っています。

【都市交流室職員】

確かに外国の方が手続きに来られるに当たって、都市交流室があるということを皆さん知られているかどうかというところと知られていない部分があると思います。ただ、市民課を例として使わせていただきますと、昨日も、外国人の方が窓口に来られていて、都市交流室の通訳支援もない状況ですと、やはり、否が応でも窓口の職員も「やさしい日本語」でできるだけ伝わろうとしている努力はしています。外国人の方が窓口に来ていることに職員が気付けば、声をかけて都市交流室に通訳支援を依頼するということはあります。

【会長】

例えば、観光客にとってどこに行けばおいしい食べ物を食べることができるかが分からなければ、そこにたどり着くことができないわけです。このことは、入口の問題だと思って、UDトークや、都市交流室に通訳してくれる職員、提案者のように民間で支援したいと思っている人がいるということでも、そこにたどり着けない人があまりにも多くなるのもつらいですね。これから、普通に考えると日本の中で外国籍の方が増えていく傾向があることははっきりと分かっている中で、そういうところの解決を何かしらできるものがあればいいのではないのでしょうか。

【副会長】

先ほどからお話を伺う中で、提案者の意図としては、在住の外国人の方にできる限り日本語を使って日本語を分かりやすくしていきましようということだと思いますが、都市交流室としては、「やさしい日本語」だけでは表現しきれないとき、英語・中国語・韓国語で通訳をしているというお話でしたが、それ以外の言語の時にはどのような対応をされているのでしょうか。

【都市交流室職員】

先ほどのお話と重複するかもしれませんが、外国人の方が日本にいられて何かの手続きをしなくてはならないとなったときに、スマートフォンで検索いただいたときには、機械翻訳ですが、高松市のホームページを多言語化しておりますので、そこを入りにされる方はいらっしゃると思います。御質問への回答としては、都市交流室で対応している言語は英語と中国語だけですので、それ以外の言語になりますと、国際交流協会というところに協力を求め支援していただくということが現状です。

【副会長】

あと一つ気になったのは、通訳が可能な方で対応しているというお話ですが、日本語しかできないであろう職員でも日本語で説明できるようになれば、もっとコミュニケーションが円滑になるのではないかと、わざわざ通訳の方を呼ばなくても少し言い換えただけで意思疎通が行くケースがあるのではないかとこのお話だと思っております。先ほど、対応が難しいという言語もあるということでしたが、それについては、不可能なので対応しないつもりなのか、いったんは英語にして他の部分で「やさしい日本語」を取り入れる余地があるのかどうかをお聞きしたいと思っております。

【都市交流室職員】

総論として、「やさし日本語」というものは、市民課の例ですと、出来るだけわかりやすく目に入りやすくということで取り組んでいますので、言語に関しても分かりやすくするという事は大事だと思っています。基本はそうなんですけど、言葉としてどうしても難しいものは、「やさしい日本語」にできるかどうかという懸念があるということをおしあげたつもりでございます。

【副会長】

でしたら、できるのであればやってみたいけれども、できるかどうか不安があるから、なかなか積極的に言いづらいということでしょうか。

【委員】

各課の手続きなどに関して、できるだけ「やさしい日本語」を使いましょうといった周知・啓発はできると思うのですが、色々な手続きがありますので、どこまで各課ができるのか、制度的にできるのかといったところが不透明というところが正直なところでございます。

【副会長】

現状がまだはっきりとしてないということですね。

【会長】

ちょうど今日、市民課に行った時に、日本語同士でもやり取りが難航していたんですよね。行政用語というか法令の用語というのは、日本人でも難しい場合があるので、基本的には「やさしい日本語」をどういうふうに広めていくかということで、通訳ができる人がいるケースはいいかもしれないけれども、高松市で暮らしていくので、極力、「やさしい日本語」が使える地域になって、「やさしい日本語」が使える取組を増やす、広げていくというニュアンスでいいんでしょうか。

【委員】

そうですね。広げていき、少しでも多くの人に方法を知ってもらうことで、だいぶ現状が変わってくると思います。

【会長】

話をまとめさせていただくと、「やさしい日本語」はこういうものですよというものを、今年度か来年度に向けて何かお金のかからない形で、U40と都市交流室とで何かできるものを、お互いで模索しあうみたいな形をとってはどうか。目指すべき方向は、今、何となく一致していると思うので、先ほどおっしゃっていただいた意見交換の内容をもうちょっと地域に乗っかるようなものにしていくための協議をしてもらう場を、引き続き、取ってもらう方がベターではないかと思います。

【事務局】

確認なのですが、住民票を取ろうという方は、高松に住もうと考えている方なので、簡単な日本語は分かるということでもよろしいでしょうか。

【委員】

そうですね。具体的に高松に住む方で技能実習生を主に支援をしているんですけども、彼らは、まず6か月間ほど出国前に日本語を勉強してきますので、平仮名・片仮名を読むことができ、基本的な日本語を話したり、聞くことはできます。

【事務局】

ちなみにですが、高松市のホームページは多言語されているのですが、それを使って外国人の方に案内したことなどはありますか。

【委員】

正直に申しあげますと、このお話を提案するときに、市のホームページを見させていただいたのですが、まず見づらくどこに行ったらいいのかが分かりません。そこにたどり着いたとしても、とても分かりづらい言葉、固い言葉で記載されているので、おそらくそれを開いた段階で外国人の方は見ないのではないかと思います。ホームページを見たという人もいないです。これは私個人の意見ですが、英語と中国語はしっかりと翻訳文をつけておられたので、その方々にはすごく分かりやすいのかなと思いました。

【都市交流室職員】

ホームページはもう少し言語数が多かったと思いますが、先ほど会長がおっしゃられたように、制度の難しさというのを市民課に行ったときに出くわしまして、そもそも「戸籍」がない国もありまして、そこから「戸籍」っていったい何なのかという説明が必要になります。「嫡出子」のような日本人でも難しい言葉を外国人の方に説明することは非常に難しいということは市民課でも聞きました。そうなってくると、基本、入口の部分は「やさしい日本語」で分かりやすく説明することは大事だと思ってまして、そこから先の部分は通訳支援なり、詳細な説明をして手続きを取っていただくということですので、正確に伝えるというところで多少は難しい言葉を選んでしまうこともあるようです。

【委員】

すごく難しい事例に当たったのだと思いますが、外国人の方がそういった事例に陥った事例がどれぐらいあるのかということ、一度、都市交流室の方でデータ等を取られて、仮に「戸籍」という言葉を理解する必要になった事例が何十件もあったということであれば、例えば、専門家の通訳の方にその部分だけ言語化して単語表を作っておくような対応もできるのかなと思います。ただそれには経費も掛かるので先の話になるのかもしれませんが。

【都市交流室職員】

今回の御提案が「やさしい日本語」にできるだけしていきましようというところで、難しい話は通訳等で対応できるとして、できるだけ窓口の職員にもやさしい日本語を使えるような周知・取組が今後できるのかなと思ったところです。

【会長】

今の話でいうと、市民課を始めとした窓口の部署に周知文等を送ったら終わってしまうんですよ。それだと面白くないので、「やさしい日本語」の周知・徹底というものを窓口だけではなく、どうせなら「やさしい日本語」というものが存在して、これから外国人の方が増えていくのでそういうものを使った方が良いでしょうよといった、広げていくような取組の方がアプローチとしてU40っぽいなと思います。

【都市交流室職員】

今回は窓口での取扱いということで話をしてきたのですが、色々な場面で「やさしい日本語」は使えると思うので、「やさしい日本語」があるというところから広く啓発していくという方法はあると思います。

【委員】

先ほど会長がおっしゃったように、正直なところ、私は色々なところに携わらせていただいたのですが、高松市で都市交流室がそういうことをされていることは、このU40に入って初めて知りました。せっかくそういう活動をされているのであれば、「やさしい日本語」について何でも聞いてほしいというような音頭を取るなどして、都市交流室の存在をアピールするためのツールに使われることはいいきっかけだと思います。

【会長】

都市交流室には、職員が何人在籍しているのですか。

【都市交流室職員】

管理職を含めた正規職員が3名いるほかには、通訳の非常勤嘱託職員が3名いる比較的小さな組織です。

【都市交流室職員】

市民課に所属していたことがあり、窓口外国人の方が来られた当時の対応を思い出していたのですが、「やさしい日本語」を使って話していたつもりではあったのですが、今から振り返ると伝わっていない部分もあったと思うので、「やさしい日本語」の周知は全庁的にしていけないといけないと思ったところでした。

【会長】

まずはそこからのような気がしますね。周知・徹底からつなげられるように、まずはここで交流していただきたいと思います。それでは、次のアイデアに進みたいと思います。

#### 【委員】

今回提案したアイデアは、去年、工芸ウィークに携わっていて、今年は芸術祭の年でもあるので、島の食と工芸がつながるようなイメージを持ちたいと思って提案したものです。工芸というものは、やはり敷居が高く、高松の人はなかなか手の届かないイメージを持っているようでして、前回の工芸ウィークの中でも、観光客がすごく多いイメージがあり、実際にそういう意見もありました。地元の人が入りやすく、工芸品も手に取りやすい身近に感じられるアイデアがないかと思い、食というキーワードであれば、市民の方も食いついてくださるのではないかとの思いからこの提案をしております。実際、島の食となると、女木島・男木島・大島にある食を調査していかないといけないということと、どこからどういう食材を手に入れるのかを加工してくださる人たちと考えなければいけないというところが一つ課題になっています。あとは、それを提供してくれる場所をどうするかという課題があり、その2つが課題となっています。具体的な調査もできていないですし、具体的な提案からも考えられていない状況になっています。

続いてのアイデアについても、伝統工芸品を作る職人さんがいらっしゃるのですが、もう少し具体的な、工芸品だけでなくその奥にいる職人さんや工房やアトリエなども紹介できるような印刷物をつくれなにかという提案です。ただ、予算があまりないとのことでしたので、例えば、印刷物ではなくWebなどで発信するといった方向転換はどうかということは考えていますが、それを発信するための素材などは経費が掛かってくるのではないかと考えています。

#### 【産業振興課職員】

一つ目のアイデアについては、この会議の前に提案者にお話させていただいたのですが、具体的にどのような食材があって、御存知であればどのような提供者がいるか紹介していただいて、高松のお店で開催するのかどうかをお聞きさせていただいたところです。現在、たかまつ工芸ウィークの内容について考えており、固まりきっていないところがありますが、チラシを配布させていただいたとおり、今年度、実行委員会を立ち上げまして、各販売店や漆器組合、盆栽振興協議会、商工会に入ってください、ワークショップであるとか産地ツアーであるとか各店舗でどういうことをしていくのかを協議しているところです。もし、今

年度に間に合ったら今年度を実施して、間に合わなければ来年度の中で実施していけたらと考えています。食材については、提案者と情報を交換しながら絞っていかないと具体的なところが練っていけないと思っております。

2つ目のアイデアについては、皆様に配付させていただいている資料として、高松市の伝統的ものづくりとして23品目を指定して、活動を支援したり販路開拓をしたりだとか普及啓発だとかの活動に対しての支援を行っております。品目の紹介として市が作成しているのは、配付資料のものとホームページ上に写真と説明文を載せさせていただいて周知をしているところでもあります。印刷物については、職員がデザインしたもので、必要に応じて印刷して使用している状況でございます。予算をかけずにというところでございますが、市として伝統的ものづくりの23品目のパンフレット自体を利用する機会がそんなにありません。どちらかというと、事業者が工房であるとか職人をターゲットにしたパンフレットを作っただいて、展示会等に持って行っていただいてPRしていただく方法が効果的であると考えておまして、そういうふうに使っていただける補助制度を設けているんですけど、市が全体的に網羅的に説明するものではこういう簡易なものを考えておりますので、新たな予算のかからない方法でと提案者に回答させていただいたものです。やはり印刷物となると印刷製本費など経費が掛かってきますので、Web等で同じようなホームページがありますのでもうちょっと内容について詳しく御提案いただいたら、今後また考えられると思います。

【産業振興課職員】

若干、補足いたしますと、昨年度から引き継いで、たかまつ工芸ウィークとして計画をし、実行委員会を立ち上げているところですが、御提案のように食というところを絡めることが出来れば、広がりが出てくるのかなと思っております。どうしても、実行委員会のメンバーも漆器・盆栽・庵治石といったところがメインですので、そういったところにも提案していった広がりをもっていければいいなという思いはあります。また、印刷物づくりというところではありますが、素材でありますとホームページでも掲載しておりますし、そういった一定程度作ってきたものもございますので、色々なアイデアをいただいて広がりを持たせていければと思っております。

【会長】

今の市の回答を受けて、提案者としてはどうでしょうか。

【委員】

今年も工芸ウィークがあり、実行委員会も立ち上がっているとのことなので、その島の食というところが調達であったり場所であったりどういうふう加工するのかというところが一つのプロジェクトとしてやっていくのがもしかしたら難しいとなったときに、例えば、ワークショップの中で取り入れていただいたりだとか、一部分だけでもそういう広がりがあれば良いなと思いました。印刷物にしても、予算がすごく難しいというところは理解しましたので、市のホームページをまだ見れていないので、ちゃんと見て何か提案が出来たら良いなと思います。

【委員】

先日、瀬戸芸の春会期の最終日に沙弥島に行きまして、沙弥島では春会期の間島のお弁当を販売してまして、もちろん芸術も楽しんだんですけど、そこに食というものが追加されたら、満たされるものが増えるなということを感じました。

【会長】

第3期で卒業された委員がよくおっしゃられていたのは、工芸と食だけでなく子どもとも結び付けたいとのことでした。子どもが来てくれると、当然、保護者が付いてくるので広がりって思っている以上に大きいです。

【委員】

菓子木型を使った和三盆の型抜きワークショップもどこかの場所ではなかったですか。

【会長】

いつ来てもできるという形で実施してましたね。時間の制約がないので、観光客の方にとっても参加しやすい形ですし、子どもがいる家庭でも参加しやすい形でもあるんですね。今回は「こども」色が薄くなっていますし、子どもに伝統工芸というものに触れてもらわないとこれから先細りになっていくと思います。その辺りも考慮していただきながらやり方を考えていただければありがたいです。

【委員】

島の食ということですが、高松の食ではダメなのでしょうか。

【委員】

特に限定せず、工芸に食を掛け合わせることが出来れば良いと考えています。

【産業振興課職員】

私のイメージとしても、女木島・男木島といえば漁業が盛んなので、美味しい魚が思い浮かべられます。

【産業振興課職員】

農林水産課の職員にもどんな食材があるのか聞いてみたところ、ニンニク、そら豆、エンドウ豆、落花生とのことでした。たかまつ工芸ウィークの開催時期が秋なので落花生が旬にはなるかと思います。

【会長】

女木島といえば、落花生と洞窟のイメージはすごくあります。

【産業振興課職員】

島はやはり水が少ないので、豆を育てやすいようで、あとは先ほどもありました漁業になるかと思います。

【会長】

今話が出たように、食のイメージや対象者の枠を広げていただきながら、意見交換を進めていただきたいと思います。

【委員】

私自身、中高生とコミュニケーションをする機会が多いので、和三盆のソフトクリームなんかは、若い子に知ってもらいたいという思いで取組をされているようなです。こういった伝統工芸となると、中高生や大学生といったところが置き去りになるので、そういった観点もあると面白い取組になると思いました。

【会長】

ぜひ枠を広げる方向で意見交換を進めていただきたいと思います。それでは、関係課との意見交換は以上となりまして、関係課と協力関係にあるアイデアについて現状の報告をしていただきたいと思います。

【委員】

現状を共有させていただくというところで、皆さんも御存知の東京2020オリンピック・パラリンピックがいよいよ来年に控えていることもあって、その関連イベントがあるのですが、関係者が多いのでけっこう制約があるようです。

市としてやらなければいけないことを整理すると、1つ目は台湾のパラの選手が合宿で来るということ、2つ目は高松市が共生社会ホストタウンの登録を受けているということが大きく関わっています。1つ目のところは、スケジュールの日程が不確定なところがあって正直難しいところがあります。2つ目のところは、全国にホストタウンの登録自治体はたくさんあるのですが、共生社会ホストタウンの登録自治体はそんなになくて、昨年度、日本パラ陸上競技選手権大会も開催しているので、パラに関わる共生社会ホストタウンの方が市としてPRしていかないといけない大命題になっています。

今、スポーツ振興課として想定しているイベントがあり、私たちとして去年蓄積できた、地図を作ってまちの人と関わっていくまちの人に知ってもらうということが私たちの強みなので、先ほど申しあげたことを市民レベルまで、前の議題でお話に出ていた子どもといったところにまで落とすということが出来るというメリットがあります。U40でやるメリットは、それが市民レベルにまで落とせて、例えば去年マップを作ったときに、仮に市の事業となると特定の場所やお店を掲載することが難しくなります。一緒になったときの一番の効果は、U40として事業に入ると、市としてできなかったことが、広がりが生まれるということ。スポーツ振興課としてもメリットだと思ってくださっています。ちなみに、私たちとしては、不確定なものもあり、パラという難しいところではあるんですけど、イベントの中で、今までやってきた市民レベルで落とすというものを、つまり機運を市民レベルで醸成していくという目的があります。

今、私の方で集めている案というのが、パラカヌーだったりパラ卓球だったりですごく頑張っている人たちがいるんですけど、残念ながらその情報が市民の方に下りてこなかったりだとか、あとはパラの競技の見方が分からないとか面白がどこなのかみたいなのところがあると思うので、そういうところの情報をまず集めて、そのイベントに対してPRしていくとか集めていったものを皆さんに落とし込んでいくというところで御協力できればと考えています。私たちの中ではそこで市民レベルに落とし込んでいくというところで、自由に動いていけるというところが強みであるので、そこをスポーツ振興課と協力しながら頑張っていきたいなと思っています。

#### 【会長】

第3期を経て第4期になったときに、スポーツ振興課の温度感が一番高くてすごくうれしかったんです。第3期に色々な課とやり取りをさせていただく中で、第4期でも同じようにアイデアを出すとなったときに、すごくアクティブにお話

に乗っていただいたのが、スポーツ振興課なんですけども、そうなった経緯とかU40と一緒に取り組んで良かった点というのがあれば、ぜひ聞かせていただきたいです。

【スポーツ振興課職員】

昨年日本パラ陸上競技選手権大会の経緯ですが、誘致の方に3年前から動いていて、日本パラ陸連から当初こちらの予定していた年よりも1年前倒しでやってくれないかという依頼があったのがそもそもの話なんです。こちらとしても実行委員会を直前に立ち上げる中で、一番懸念していたところとして、今までの大会ではお客さんがほとんど入らないということでした。外で色々とイベントをしているんですけども、中の競技に関しては一切見に来ていないようです。そういうところが、今からパラを推進していくという中で、まず知ってもらおうというところを、やはりこちらとしても重点的に置かないといけないという認識でいました。まずは、どれだけお客さんを入れられるかというところを焦点に当てて、色々な賑やかしの様なものやっていたんですけども、そもそも、スポーツ振興課単独でもなかなかマンパワー的なところも弱く、色んなところで企画が出てくるんですけど、そういうところも全てができるわけではありませんでした。

その中で、U40の中で日本パラを盛り上げていくというところがあったので、こちらから、こういったところをしたいことがあるのですがしてくれませんか、とお願いしたものがそもそもの経緯なんです。そこに関しては、快く承諾していただいて、実行委員会を立ち上げる中で、宿泊施設のバリアフリー情報がなにか、せっかく来ていただくので観光を楽しんでもらいたいとか、そういったところの発信が弱いと、いろんな先生から課題を指摘されていました。そうやって首をひねっているときに、ちょうど桑村さんからお話を聞く機会があって、何とかこのあたりお願いできないですかとお願いしたら、「CAN MAP」もそうですし、研修もしていただいて、とても協力的にやっていただいて、大会当日も配布していただくとか色んなところで協力いただいて、こちらとしてはすごく助かりました。民間の方も集まっていたいただきましたし、弱いところに対しての動きの速さであるとか、そういうところはすごく助かったなというのはあります。

ただ、やはり行政なので予算化するのに時間がかかるとか、それなりにもうちょっとやっていきかけたのに予算が付かなかったとか、直前で仕様を変えたりとかがあったりしたことは申し訳なかったなと思います。もし、今回もやっていただければ、こちらとしても柔軟に対応できるように、これから検討もしたいし、皆さんと頑張っていきたいと思います。

オリンピックが2020年にあるんですけども、実は2021年に世界パラ陸上大会が神戸で開催されることが決まっています。高松市としては、9月30日から10月4日で、今年ドバイで開催される世界パラ陸上大会の日本代表合宿を屋島レクザムフィールドで行うことが決定しております。ですので、2021年の神戸開催については、国内外選手の事前合宿であったりとか、ジャパンパラ陸上競技大会の誘致をして世界パラの事前選考レースの大会を屋島で行うなどして、神戸の大会を盛り上げるとともに、高松市にとってもパラ陸上の認知の機会となっていくように考えています。やはり、オリンピックが終わったらトーンダウンしていくような形になるので、逆に2021年以降こういった大会を誘致していったりと色々こちらも仕掛けていって、引き続き、こういったパラの機運を上げていければと思いますので、御協力よろしく願いいたします。

#### 【スポーツ振興課職員】

当課では、今、大きなイベントが業務の多くを占めており、一つのイベントをそれなりにしようと思えばそれなりにできるんですが、そうではないので、当課だけではすることが限られているので、市役所の中での横のつながりであったり関係課だとかできるだけ色々な民間事業を巻き込むことによって、いろんな人が入ったりいろんな意見をいただくことによって、私自身参考になる部分がすごく大きかったので、これからのスタンスとしてもやっぱりできるだけ色々な方に参加していただいて高松市民皆で盛り上げていくようなやり方は今後も続けていきたいなと思っています。

#### 【委員】

ありがとうございます。市役所の中でもスポーツ振興課があって、マップを作るときには、障がい福祉課と政策課ユニバーサルデザイン推進室というところとプラス、招致というところとなると都市交流室と、色々な部署との関係があり大変だったんですけども、私たちができることやりたいこともあるんですけども、やっぱりそれが一緒に一つになっていく中で勢いがついてくるのがすごく面白いと思いました。加えて、メンバーの中でも民間で働いているスタッフと市役所で働いているスタッフとすごく良いバランスでできたというのがあるので、色々とどういうふうに出していくのがベストなのかっていうのは色々試行錯誤しましたが、一緒に協力できたのがよかったと思います。

#### 【会長】

ありがとうございます。これからも一番やり取りが続くと思うので、できるだ

けの協力とアイデア出しとそれぞれの関わり合いの中で盛り上げていければいいなと思うので、是非、よろしく願いいたします。それでは最後のアイデアについてお願いします。

【委員】

まずは観光交流課から、先日の取組について御報告いただきそれに対して私から付け加えるという形にさせていただければと思います。

【観光交流課職員】

高松外国人観光客お助け隊の活動なんですが、この活動自体今年度から始動したものですので、まずどういったことができるのかというところを調べるために、5月19日にJR高松駅・高松港フェリー乗り場・クルーズ船岸壁・商店街を学生たちと周りました。U40委員の御二人にも同行いただきながら、目的として市街地の外国人観光客の状況を把握した上で、具体的にどういうところで活動するのがよいのかということを決めていこうということで周りました。市役所に戻った後は、どうだったかということの意見出しを行い、主な意見としては、瀬戸芸期間中だったため港が混んでいた、係の人が付いていたけども対応が追い付いていない、アジア圏の外国人観光客向けの情報が少ないのではないかと、いろんなところに案内向け用のマップやツールがそろっているけれども目立った場所に置いていないのではないかと、あとは瀬戸芸の期間中だったんですけども商店街にあまり外国人が歩いておらず丸亀町の案内所も前日の土曜日の件数が3件だけだったということでした。

それを踏まえて活動内容とか場所については、高松駅とか港で活動するのがいいとのこと。道案内をする際には、観光MAPを利用した上で、書き込みながら案内を行いたいとのこと。あとは、切符の買い方が分かるようなツールづくりにも取り組みたいことや、こちらから提案した形にもなるのですが、クルーズが今年20何件来て、クルーズの岸壁でいろいろ外国人が来られて市内各地に出かけて帰ってこられたときに高松はどうだったですかといった声掛けといったものをしてはどうかと提案を試みたところやってみてもいいかなという反応でした。今後は、駅とか港を中心とした街頭での声掛けの活動だとかクルーズ船と国際会議だとかの外国人が必ず来るようなイベントを狙っての対応を検討してはいかがですかという話になりました。今後のスケジュールは、この日曜日にJR高松駅とかをこの日もクルーズ船が来るので、このような活動をしていただいて、クルーズ船で県の職員の担当の方が誘致活動をされて実際に立っていらっし

やってこういったニーズがありますよという説明をしていただこうかと思っています。7月上旬の定例記者会見でお助け隊の活動についてプレスリリースをして、中旬から本格的にユニホームも来て活動をしていこうという流れで考えております。5月19日の活動内容については以上です。

#### 【観光交流課職員】

もともとこの活動を始めたきっかけが、観光ガイドの高齢化から入ってまして、若い世代にもこういうガイドに関わってほしいと色々な方からアドバイスをいただきながら学生のこういった活動を進めてきているところで、実際にこの前の5月19日の活動のところも提案者ともこういうことが出来たら良いといった話もしていたので、今日も皆さん集まってくださっているので色々と御意見をいただけたらと思っています。

#### 【委員】

ありがとうございます。内容についてはしっかり説明していただいたので、私としては参加してみた感想を述べたいと思います。率直な感想から言うと、とても楽しかったという一言に尽きます。そもそも、今回、中高生のガイドチャレンジというものを提案させていただいた目的は、前回の意見交換の中でも観光交流課にお伝えはしたのですが、別に観光ガイドをすることが目的ではないということです。というのは、中高生が自分の住んでいるまちを知るきっかけ作りをしたいというのが一つあり、もう一つが、私も子どもがいるのですが、学校の建物以外での活動の機会を欲している子に、その機会があったらいいのになというものが以前からあって、色々と考えていた時に、観光ガイドというものが、比較的親和性が高いのではないかとあって、アイデアを出させていただいた経緯になります。それを踏まえた上で、同行させていただいたのですが、感想としては楽しかったというのと、参加していた大学生というのがすごく意欲が高くて、出身も地元の学生が多く、もっと自分のまちを知りたいとか自分のまちの良いところを観光客はもちろん自分の友達にもしゃべれるようになりたいとか、そういうことを言っている学生が多くて、すごくうれしいなと思いながら同行させてもらった次第です。

ただ、大学生はすごく意欲は高いんですが、すごく真面目で一生懸命で何とかお役に立ちたいみたいな感じで、しっかり準備をしたいとか二の足を踏むところがあるので、そこにひょっとしたら中高生を上手く巻き込めば、ある種背中を押すようなポジションになれたりするのかなと思いました。あと、先ほどの「やさし

い日本語」の話にも引っかかると思ったのですが、ツールは確かにたくさんあるんですけど、それを観光客の方が手に取っているシーンは、ほとんど見なかったと思います。丸亀町の観光案内所のものも見させていただいたし、ライオン通りの方も見させていただいたのですが、すごく立派で魅力的なツールはたくさんあるけれども、そこに観光客が行きつかない、そこにあるのを知らない、使えていないっていうのがすごくあるなと思いました。例えば、観光ガイドがそこに置いてあるツールにその人用に書きこんであげてから渡してあげるとか、そういうのがガイドの役割としてできるといいねっていう意見が出てたりして面白いなと思って聞いていました。

活動報告にも書いてあるんですけど、確かに瀬戸芸の真っただ中だったので、フェリー乗り場の辺りはとても混んでいて、大学生はあまり機能していないなと思ったようなんですが、私としては、逆に意外としっかり並べているなと思いました。直島行きも小豆島行きも男木島行きも、結構、皆行きたいところにちゃんと並べてるなと思ひまして、なんでだろうと思って見ていると、こえび隊のガイドの方が、来られた方にすぐに自分から声をかけてコンタクトを取りに行って、どの島行きたいんですかっていうシーンを見て、そうすることで、分かりにくい港だけどみんなが行きたいところにスムーズにいけるような力をマンパワーとして発揮してくれてるんだなって見てて思いました。ツールがあったりちゃんとした案内ができる場所があっても、そこに行きつかないと、なかなかもったいないなと思ったので、そこをつなぐような役割がお助け隊にはきっとあるんだろうなと見てて思って、じゃあそこにどうやったら中高生を巻き込んだら面白いだろうって、5月19日に参加させていただいてから色々と考えています。

その時に、大学生にもお話したんですけど、ガイドの役割は二つあると思っていて、分からないことにちゃんと答えてあげるっていう役に立つっていう役割と、もう一つは来てくれてうれしいという歓迎の気持ちを表すのと二つあると思ったら、一つ目はそこそこの準備と言語力が必要かもしれないけれど、歓迎するとかだったら、とっかかりとしてできるのかなと思いました。

彼らの動きもまだまだ始まったばかりのようなので、良かったらまた参加させていただきながら、見守らせていただきながら、中高生が参画できるタイミングとかやり方とかっていうのをもう少し見せていただけたらなと思いました。

【副会長】

中高生は役に立ちそうということですか。

【委員】

そうですね、役に立ちそうだなと思いました。

【会長】

今、瀬戸芸の春会期が終わって、夏会期に向かっているところで色んな混乱もあり、ポジティブな意見もあれば、ネガティブなことも聞いたり、色々ある中でこえび隊として様々な活動をする中で、この活動はこえび隊の領域に近いと思うのですが、その点で何かありますか。

【委員】

提案者がおっしゃってくださったように、マンパワーとしてはすごく充実してきたのかなと思っています。ただ、お客さんの動線を考えると、フェリーの港にはたくさんの方がいらっちゃって、なんとなくであっちこっちと案内して上手く回っているんですけど、例えば、高松駅から交差点を通らずに高松の旅客ターミナルビルを通り過ぎる上から行くコースを通ると、実はフェリーの情報は旅客ターミナルビルの1階にあるので、何の情報を持たないままフェリーに行くことになります。そのため、直島に行くのも、高速船で行くのとフェリーで行くのがあって、コースの分かれ道に面したときに、8時2分のフェリーに乗りたいのに高速船の方に行ってしまう間に合わなくなってしまったとか、そういった点は見られたので、動線を考えた上で人が足りていない場所に立っていただくと良いと思います。

あとは沙弥島のコースが春はあったので、高松から坂出への行き方が分からないとかですね、こえび隊の事務局やツアー案内所にもそういう問い合わせが来たりしました。なので、瀬戸芸に関する事だけではいいですけども、お客さんの行く先や目的地までを考えて、どこに立ったらいいだろうとかですね、どんな情報が必要なのかということを考えて動いていただけるとお客さんの役に立てると思います。こえび隊と動きを被せているわけではないんですけども、本当にたくさんの方の連携がないと成り立たないので、引き続き、やっていただけたらなと思います。

【会長】

この中高生というのは、島にも派遣するのですか。

【委員】

高松港で十分だと思います。大学生としても、玄関口であるあの辺りが活動の

メインにしたらいいのではないかという話でまとまっていたので、そこで一緒にできることがあればと思っています。あと、先ほどのお話にあった旅客ターミナルのコースですが、私も初めて通ったのですが全然誰にも会わなくて、こういう道があるんだなと思っていて、確かに切符売り場まで行くと色んな人がちゃんと教えてくれるんですが、じゃあそこに行くためにどうしたらいいんだっていうのは確かにあんまりなかったと思います。

【会長】

これは今後、例えば夏会期が始まったときに、中高生と一緒に体験させてもらいながら構想を練っていくイメージでいいのか、それとも、これからがつつり夏会期までの間に、ある程度の仮のものを組んで、夏休みの期間で大々的にやってみたっていうレベル感なのかを確認させてほしいです。

【観光交流課職員】

正直なところ、大学生たちは、意欲はあるんですけども、ものすごく控えめな感じですよ。

【委員】

すごく意欲があって本当に一生懸命にやっているんですけど、声をかけるのは慎重になっている感じです。

【観光交流課職員】

今おっしゃっていただいたような状態なので、こちらからがつつり提案したところで、乗ってくれるかどうかというところがありますので、こちらのイメージとしては6月中に7月中に何度か街頭に立って、経験を積んだうえで、その状態で一度、提案者にも見ていただくような感じでもいいのかなと思っています。

【委員】

私も同意見で、今の彼らは本当に真面目で、やるからにはちゃんとやらないと駄目なんだという感じがあるので、ちょっとそこに中高生を混ぜることを提案しても快諾はしてくれなさそうです。なので、私ももうちょっと彼らと近づきながら、信頼関係を築きながらやるのがいいのかなと、彼らに関してはそう思いました。

【委員】

過去に、ボランティア育成講座でも取り上げた「声のかけ方」を研修してあげてもいいのではないかと思います。

【会長】

小学校高学年ではだめなんですか。

【委員】

全然いいと思います。

【副会長】

お助け隊の主体は、大学生ということですよ。観光交流課としては、彼ら主体の活動をサポートしているということによろしかったでしょうか。

【観光交流課職員】

大学も3つの大学から来ているので、どれほど打ち解けているのかによると思います。

【会長】

大学生と交流の多い委員の方もいらっしゃいますので、その方からアドバイスをいただいてもいいと思います。また、そういう活動をしているという発信してもらえると、今いる大学生以外からも一緒に活動したいという声が出てくるようになり、違う化学反応も出てくると思います。あくまで理想論ですが、せっかく色々な委員の方がおられるので、そういうこともイメージしていただけるとありがたいです。

【委員】

会長がおっしゃられるように、どこまでやるのかという一定の目標を提案者側なり、市役所側なりで作ってもいいとは思いますが。それによって、大学生に対して研修をする必要があるのか、それとも、もっと多くの人を巻き込む必要があるのか、こえび隊との連携によってより効果的な配置を考えたほうがいいのか、といったように動き方も変わってくると思います。学生によって個性があるのであれば、それをベースに、どれが一番モチベーションを持って動けるのかを決めてU40でも報告していただいて、手伝えることがないかを話し合うということを繰り返していけば、より良いものになっていくのではないかと考えています。

【委員】

背中を押していただけたと思います。御迷惑でなければ、とりあえず、もうしばらく一緒に、伴走のような形であと1・2回ほど御一緒させていただければと考えています。その後、皆さんに色々と御相談させていただきたいと思います。

【委員】

大学生達には、是非、こえび活動にも参加してもらいたいと思いました。こえび活動は、全体的に老若男女色んな方が来てくださっていて、子どもさんが一人で参加することもあります。必然的に自主的に動かないといけなくなる状況になります。例えば、作品受付に入るとなると、どうしてもある程度のルール・マニュアルの下で、色んな方を迎え入れるんですけど、そのルールも自分で考えて理解しないといけなくて、自分から自主的に「こんにちは」としゃべっていかないといけなくて、何かしら自分から動いていかないといけなくて、ただ、周りからのサポートはあるという状況で、一般の方や初心者の方も参加しやすい活動だと思っています。まず、色んな人が来ているので、色んな人がいるということに気付くきっかけにもなるかと思ったり、高松港や高松駅だけが御案内の場所だけではなくて、その先々のお客さんの行動だったり、目的を知るというきっかけにもなるので、是非、参加してもらえたらと思いました。

【会長】

どうやって参加したらいいのですか。

【委員】

ホームページでこえびと調べていただきましたら色んな活動が出てくると思います。今は、会期外になるので活動は少なめにはなります。

【会長】

今日の議題で共通していることは、取り組んでいるけど知られていない、共生社会ホストタウンにしてもこえび隊の実際の活動にしても、様々な良いことをやっているのだけれど、そこにたどり着けば面白いことはできるけれどもそこがいきついていないというところは、U40がそこに入り込んでいってもいいんじゃないかなと思っていて、それをそれぞれ子どもなら、工芸、食、っていう観点でそれぞれ委員の皆さんが自分はこの情報を知っているけれども他の委員は知らないなっていうところを今日は出せないかもしれないけれども、ちょっとそういうものをお腹に抱えながら、これをすぐに事業化できるとかできないとかではなくて、U40の一つ存在として、そういう情報をこの場で共有することによっ

て、「こえび隊」で検索したら小学生からボランティアに行けることも全然知らなくて、「やさしい日本語」に関して「やさしい日本語」を検索して初めてこういったものがあるのかといったことが分かるので、でもUDトークは使ったこともあって存在も知っていたのですが、関連性があることを今日初めて知ったわけです。やっぱりそういうふうには、別々の関係なさそうだけれども結構関係性があるっていう強引にでも結び付けていくっていう作業を、是非、委員の皆さんにさせていただくと、それが事業化するとかしないとかだけではなくて、高松市がもうちょっと情報が共有化されて住みやすい地域になるのではないかと思います。

【市役所U40】

今日の話はすごく勉強になったと思いました。たかまつ工芸ウィークは秋に開催するのですが、実行委員会の中でもチラシを作るだけでなく、どこに置くとかとりあえず手に取ってもらおうという話だったり、食と関連付けたいという話だったり、実行委員会の中でも出ているところです。違う事業でも悩んでいるポイントは同じなんだということは勉強になりました。

【市役所U40】

今日5つのアイデアについて取り上げたのですが、最初の「ことばのバリアフリー」に関しては、おそらくそのまま行くと「やさしい日本語を使ってください」とう案内が出て終わりになるのかなと思っています。ただ、「やさしい日本語」とは何なのかを理解しない限りは、呼びかけたり、それに基づいてホームページを更新してもらったりと依頼をしたところで、広まっただけではいけないので、まずは「やさしい日本語」とは何なのかを理解する研修のような場を作る必要があるのではないかと思います。そしてそこはおそらく、知っていく、確認していくというルートに入るであろう役職の、課の組織でいえば「課長補佐」の人が知ること、チェックできるという点もあるのではないのでしょうか。そういったように、何がいいのかを考えながら、まずは研修をしていったらいいのかなと思います。そこが分かってもらえれば伝わっていくので、機械翻訳されるという話も、おっしゃられるとおり、翻訳元の日本語が翻訳しやすい形でない限り、翻訳されたものが全く読めないものになるというのはなるほどと思います、大事かなと思います。途中で会長がおっしゃられたように、日本人同士でも会話が通じないことがあるので、そこを抑えればお互いにしゃべりやすくなるということもあると思います。

また、関連していると思ったところで、「高松を障がい者スポーツをメッカに！」も根本は同じ話なのかと思うので、全体的には近いのかなと思いながら聞いていました。

「工芸×島の食」では、「工芸」と「食」ではそれぞれを目的にする世代が違うと思うんです。工芸はそれなりの値段がするので、購入層はお年を召した方も多いし、食の種類を島に限定するのかなという話もあるのですが、島の食だといわゆる瀬戸芸に来ている人たちに訴求力があるのかと思います。「高松の食」ということであれば、おそらくもう一つ縛りを作ってあげた方が分かりやすいのではないのでしょうか。伝統工芸品に関して言うと、値段が一番の問題だと思うので、漆器で御飯を食べたとしても、それだけではおそらく購入には至らないと思われます。工芸品は横軸でいう種類の幅は多いかもしれませんが、縦軸の値段というところの幅があんまりないので、とっつきやすくするために、食で歩み寄ると同時に、工芸側でも歩み寄らないとちょっと厳しいのではないかと思います。

「高松外国人観光客お助け隊」に関しては、何をしたい集まりなのかがよく分からなかったです。今年は瀬戸芸なので、皆の頭の中が瀬戸芸になっていますが、こえび隊をしたければ、おそらくこえび隊に行っているんです。なので、こえび隊に行けないけど、こえび隊のようなことをしたいという微妙な層の人たちなのかなと思いました。それか、瀬戸芸ではなくてもっと案内したいものが別にある人たちなのかが分かりません。こえび隊はすごく自分で考えて動かないといけない部分が多々あるので、こえび隊に入ることによって変わる可能性があると思うので、その研修的な部分で、放り込んであげたらいいのかなと思ったりしました。あと、街中に住んでいる人間から言わせていただくと、午前中に外国人がいないのは店が開いていないからだと思います。また、高松にあまりお金が落ちていないのではないかと心配なところがあるので、こういうところで色んな気付いたところがまちに集まっていくことで、まちの活性化につながって、昨年度の「CANMAP」を作ったときのような話になるかと思います。今日の議題は、一つずつバラバラとあるように見えるけれども、本質では一緒のことをやっているという意味ではU40らしくて面白いなと思いました。

#### 【市役所U40】

私は今年度、異動となって、外国人のお母さんが子どもを預けたいという話が出たときに、窓口の方が頑張って英語で対応しようとしているのですが、一つ上の階に通訳が対応できる職員がいるということも知らないようだったので、横のつながりが本当に希薄なんだなと思いました。U40という場も、今も事業化の

段階なので、アイデアを広げるというよりは磨いていく場だと思うのですが、アイデアが煮詰まってくる時があると思うのですが、その時は横のところからアイデアをもらうことが大事だなと今日のどのアイデアに対しても思ったところです。

【市役所U40】

私は、都市交流室の存在を広めたいなと思いました。

【会長】

それは、本当に大事なことだと思います。まずは、知るということが大事なので、そこからアイデアが広がることもあるし、今日出てきた事業にしても知ればもっとこういう効果的なことができるのということがたくさんあると思うので、是非、そこにアンテナを張っていただきたいです。事業については、ここで進むものと進まないものがあると思うので、特に、この第4期からスタートした方については、関係課職員の発言からどういうふうにしたら協力体制が得られやすいのかというヒントがあると思うので、是非、参考にさせていただきながら、今これから進んでいくものについては積極的に協力をしていきつつ、2年間の任期があるので、またその次の年のことも考えながら、自分たちの代でできるとかできないとかではなくて、こういうことが抜けていたとか、こういうことが出来そうだけど上手くいかなかったんだということが出来るように、もう1つ次のことを考えながら取り組めたらなと思いますので、引き続き、よろしくお願いいたします。

3 閉会

(事務局から事務連絡の後、閉会)